

子どもと「離れる」ことをめぐる 母親の意識の様相

甲斐 暁子

I はじめに

子育ては、妊娠から始まり、出産、育児と続いていき、子どもを自立させるまでの過程を指すと言えるだろう。しかし、最近、社会人になっても家から出て行かない人や、結婚しても母親との密接な関係が続いている人もいる。斎藤(1)は「子どもが成人して以降も、『同居』や『密着』を続けることは、それが長期化するとともに、容易に共依存的なもたれ合いに変質してくる。子に適切な「親離れ」を求めるには、まず親自身がそれに先立って、「子離れ」を意識する必要がある」と語っている。

母親が子どもの自立とともにスムーズに子離れすることが出来るようになるために、子育ての過程において、子どもとの精神的、身体的な距離を徐々に取れるようになることが必要であ

ると言えるのではないだろうか。

母親は、出産後、様々な理由により、また、時期はそれぞれに異なるであろうが、子どもと「離れる」時を迎える。その時、母親はどのような思いを抱くのだろうか。

母親にとって、子どもと「離れる」ことはどのような意味を持つているのか、どのような経験であるのかを知ることが、子育てを考える上で大切なことだと考えられる。

II 目的

二〇〇六年に甲南大学人間科学研究所が実施した「(第一回)子育て環境と子どもに対する意識調査」の回答者の中から協力者を募り、インタビュー調査を行った。本論文では、インタビューでの母親の語りとアンケート調査の回答から、子どもを預けることを通して、母親が子どもと「離れる」ことを子育ての過程でどう意識するかという点に着目し検討することを目的とする。

III 方法

1. アンケート調査

〔第二回〕「子育て環境と子どもに対する意識調査」
調査期間…二〇〇六年六月～七月

調査対象…計二〇〇票配布

○K市H区内の全公立保育所・公立幼稚園の在籍児の保護者

○K大学カウンセリングセンター心理臨床カウンセリングルーム主宰の子育て支援グループに在籍する〇〇六歳(就学前)の子どもの保護者

回収数 ○六四八(保育所三二五、幼稚園三一五、在宅八)

○有効回収率三二・四%

2. インタビュー調査

調査対象…右記アンケート調査においてインタビューへの協力を申し出た一一五名の中から、順次依頼し、二〇〇七年七月から八月にインタビューを実施した十四名(表1)

場所 …K大学カウンセリングセンター内の面接室
方法 …予備面接調査を経て、約八十分の半構造化面接実施
質問項目…(1) 家族構成

(2) インタビューの協力動機
(3) 子育て中の母親の気持ち

- ① 毎日の子育ては楽しいですか
- ② 子どもをかわいいと感じますか
- ③ 子どもと一緒にいる時間は、自分にとってちょ

表1 インタビューした母親の年齢、子どもの年齢、性別、きょうだいの有無

	幼A	幼B	幼C	幼D	幼E
母親の年齢	34歳	34歳	44歳	36歳	37歳
子どもの年齢	6歳	5歳	5歳	5歳	5歳
子どもの性別	男	女	女	女	男
きょうだいの有無	兄	兄、弟	姉	妹	姉

	幼F	幼G	幼H	幼I
母親の年齢	42歳	28歳	35歳	41歳
子どもの年齢	6歳	5歳	5歳	4歳
子どもの性別	男	男	男	女
きょうだいの有無	兄2、弟	兄	弟	兄2

	保A	保B	保C	保D	保E
母親の年齢	37歳	37歳	36歳	39歳	38歳
仕事の形態	常勤	常勤	パート	パート	常勤
子どもの年齢	5歳	3歳	5歳	3歳	4歳
子どもの性別	女	女	女	女	女
きょうだいの有無	弟	なし	兄	兄	姉

- ④ 「子育てにおいて自分が犠牲になる」という感覚はありますか
- ⑤ 今の生活は自分らしいと感じていますか
- (4) 子育ての相談相手について
 - ① 子育ての不安や心配事を話す相手はいますか
 - ② 実際どのような人に話すことができていますか
 - ③ 母子が日常で別々に過ごす体験について
- (5) ① 子どもを預けたい時に預ける先はありますか

の回答結果は次の通りだった。
アンケートの中で、「子どもを預けたい」と回答している母親は一人中一〇人、七二%、(幼稚園母は九人中七人、七八%。保育所母は五人中三人、六〇%)であった。

IV 結果

以下では、質問項目(5)③に対する語りを中心に取り上げ分析を行う。

- (6) ② 預けるにあたって苦労したことはありますか
- ③ 就学前に母と子が「離れて過ごす」ことは意味があることだと思いますか
- ① 父親は子育てに参加について
- ② 父親はどのような面に対して「協力的」だと思いますか
- ③ 「父親」として望むことはありませんか
- (7) その他「子育て」について話したいこと

また、「預けることのためにためらいがある」と回答している母親は一人中四人、二九%、(幼稚園母は九人中三人、三三%。保育所母は五人中一人、二〇%)、「預けることのためにためらいがない」と回答している母親は一人中一〇人、七二% (幼稚園母は九人中六人、六七%、保育所母は五人中四人、八〇%)であった。

アンケートの質問項目「通常の通所通園以外で子どもを預けたいと思いますか」に対する回答と、インタビューの中から、「預ける」というキーワードで抽出した語りの内容が一致していたのは一人中八人、五七%だった。

一致していた幼稚園母は九人中三人だった。内訳は、「預けたい」で一致していたのは二人、「預けたくない」で一致していたのは一人だった。

一致していた保育所母は五人中五人という結果であり、全員がアンケートへの回答とインタビューでの語りが一致しており、「預けたい」で一致していたのは三人、「預けたくない」で一致していたのは二人だった。(表2)

以下に、インタビューでの「預けること」についての母親の語りを抽出して示す。(以下、保育所〓保、幼稚園〓幼と記述)

表2 「就学前に母と子が離れて過ごすことは意味があると思いますか」に関する語りと「子どもを預けることにためらいがありますか」に対する回答

対象者	子どもと離れることに対する母親の意識	ためらい
幼A	絶対的信頼を作りたいので、あえて離れない	あり
幼B	意味はあると思うが、自分は無理。祖父母が三歳までは反対	なし
幼C	いいことだと思うが、自分は幼稚園にもあまり入れたくなかった	なし
幼D	やめれない仕事がないから。一緒にいるほうがいい	なし
幼E	夫が三歳までは絶対よそに預けるなど。子離れしなくては	あり
幼F	半日とか一泊ならよい。長期は自分には出来ない	なし
幼G	賛成。たまに預けてみるのも冒険	あり
幼H	一日くらい、一泊ならかえっていいのでは。緊張が長く続くと可哀そう	なし
幼I	幼稚園に行くぐらいはいいが、それ以外は。9歳までは一緒にいてあげたい	なし
保A	預ける前は不安だったが、離れることは必要だと思う。	なし
保B	保育所に入れることは子どもにとってプラスだと思う。	なし
保C	三歳くらいからは離れるほうが密着するよりはいい。	あり
保D	預ける時可哀そう。不安だったが、預けることは悪いことではないと思うように。	なし
保E	働いているから、ほったらかしにしているつもりはない。日がたてばという思いが。	なし

保Aさん

アンケートへの回答は、預けたいとは思わない
 預けることにためらいはない
 アンケートとインタビューの回答が一致・預けたくない
 (三歳になったら預けるのはいい)

「乳飲み子の時は一緒にいたほうがいいというのがあるので、私は預けたけれど、物事がわからない時は一緒におった方がいいと思う。三つとかは、離れたほうがあまり密着するよりはいいんじゃないか。自分で子どもが成長するのを見ておきたかった。上の子の時はちよつと早いんじゃないかみたいな感じだったけれど、二歳くらいだったらいい。下の子の時は上を経験していたので、いつ行ってもこんなものと思った。兄弟で違う。最初の子の時はつらかった。下の子はそうでもなかった。本当に仕事に行つていいんかなあ。最初の子の時はびーびーびー泣いた。こんなに泣く泣く別れて仕事しないかんのかと。お金に余裕があれば、やめていたと思う。働かないといけないので、泣く泣く主人を恨みながら、泣く泣く行つていた。悲しかった泣いて泣いてされて。保育所の先生にエンジョイしているって言われても、朝はつらかった。預けたところのことや結構不安が多かった。」

保Bさん

アンケートへの回答は、預けたい

預けることのためにためらいはない

アンケートとインタビューの回答一致・預けたい

「保育所行っているんですけど言ったなら、『可哀そうにねー』って言われて、いや可哀そうじゃないんだけどかって。ま、泣いていたらそう言われても仕方ないと思うけれど。本に三歳まで一緒とか書いてあるけれど、ご機嫌で行っているのと思うことがあった。家計のために働いていたが、そうでなかったら、出来るだけ一緒にいたかもしれない。働かないとどうしようもないから入れるって感じ。最初の一ヶ月は泣いて、こっちも涙が出て、可哀そうに、あの子って。この子大丈夫かしらとか、保育所がどんな所か不安で。お兄ちゃんは特にすごく可哀そうだなと思っていた。二人目の時は、泣いていたら可哀想と思うけれど、ま、大丈夫っていう気持ちがある。どうなっちゃうんだらうって気持ちじゃなかったんで。でも、やってみたら、預けることは悪いことじゃないなって思った。」

保Cさん

アンケートへの回答は、預けたくない

預けることのためにためらいがある

アンケートとインタビューの回答一致・預けたくない

「子どもは二人とも6か月から預けた。最初は保育所がどんなところなのか、子どもがどう感じるかが想像できないことが不安だったけれど、二人で働かないと、月々がちよつと苦しいかなあということでも復帰した。でも、フルタイムで働かなくていいのに、子どもを朝から晩まで預けていることに罪悪感を感じることもあった。それに対して、保育所の先生が、『子どもにとっては天国だから大丈夫です』って言ってもらって、ほつとしたことがあります。ただ、小学校になったら、家に帰った時に迎える人がいないっていうことのさみしさとかで、子どもに不安とかそういうのを与えてしまうのではないかなってちよつと悩んでいる。低学年を越えるとまあ何とかなるよって他の方の意見もあるので、ココまで続けてこられたのだから、ちよつとやってみてもいいのかなっていう気持ちはある。一緒にいても、いなくても、お互いが快適に過ごすことができれば、一緒にいるいいには違いはないと思う。」

保Dさん

アンケートへの回答は、預けたい

預けることにはためらいはない

アンケートとインタビューの回答一致・預けたい

「離れて過ごすことも、子どもにとつては必要なことと思う。

『かわいそう』とか、『親の都合で』と思わないでほしい。自分の両親は『子どもが可哀そう。親の犠牲になって』と言う。そう思わないでって言いたい。専業主婦でも三歳児保育から入れたい。」

保Eさん

アンケートへの回答は、預けたい

預けることにはためらいはない

アンケートとインタビューの回答一致・預けたい

「一歳とか、一歳弱くらいで預ける方が、環境がわかっていないからいい。家が別に一番いいとは思わないかな。預けるのは間違いないので、復帰するにあたって、不安感が余計に増してしまうので。働いているからほったらかししているつもりないし自分の方針だけで育てるよりは、プロに育ててもらった方がいいと思うし。預けたい思いがあるけれど、よい意味、悪い意味、ほったらかしているつもりはない。あまり悩まない。日がたてばっていうのもどっかにある。」

幼Aさん

アンケートへの回答は、預けたくない

預けることにはためらいがある

アンケートとインタビューの回答一致・預けたくない

「何が起るかわからない時期から任せるのは私自身がしたくなかった。別れる時間を持つことはあえてしなかった。絶対的な信頼関係が欲しかったから。それだけはしなくなかった。」

幼Bさん

アンケートへの回答は、預けたい

預けることにはためらいはない

アンケートとインタビューの回答不一致・預けたい／預けたくない

「(子どもが)預けられないタイプなので、私から離れない。親としては、適当などこでもいいやって、ポンと預けるっていうのは怖くてようしないかもしれない。万が一のことがあるかなとまで考えて、預けないとだめな理由のこたえて考えると、そんなことはないかなと。そしたらやめとこかなで、子どもが行けるタイプでもたぶん預けない。でも、一人目の時、見えないうちに行ってくれたらつてもものすごく思った。自分もリラックス

スして、リセット出来て子どもに接するとかわいいと。私は一度預けてもいいかなって。でも、両親からものすごく反対された。3つまでは絶対に手元に置いて育てないため、預けるなんてとんでもないと、くぎを刺された。

ずっととか、3つまでとか、そんな必要はないと思う。子どもにも悪いことがあるような気がする。そうじゃない人も沢山いると思うので、決めつけるのは。両親から言われていなかったら、預けていたと思う。」

幼Cさん

アンケートへの回答は、預けたい

預けることのためにためらいはない

アンケートとインタビューの回答不一致・預けたい／預けたくない

「親子が離れる経験をする事については、いいことだと思う。子どもながらに、いろいろ気づくことがあるのでは。自分の親からだけではなくて。預けることを否定するつもりはない。ただ、私は私が第一発見者になりたい。なんでも。私のご飯食べている間に子どもが初めて何かを口にしたなんて。だから、上の子の時はそれが嫌で幼稚園に入れたくなかった。」

幼Dさん

アンケートへの回答は、預けたい

預けることのためにためらいはない

アンケートとインタビューの回答不一致・預けたい（笑顔なら）／預けたくない（泣くと）

「預けて迎えに行った時に泣いていたりする姿を見るとしばらくやめようと思う。今、そこまでしてやることもないから。それをまたすることはどうなのかって思う。でも、笑顔だと、たまには預けるのもいいかなと。でも、やめれない仕事があるとかではないので、一緒にいる方がいいかなって思う。夫は『まだ、いいんじゃない』と言うし。」

幼Eさん

アンケートへの回答は、預けたくない

預けることのためにためらいがある

アンケートとインタビューの回答不一致・預けたくない／預けたい

「夫が『絶対に3歳まではよそに預けるな』と。お母さんの方針かな。4歳までずっと見ていた。夫の意見と私は反対。仕事の時は保育所に預けたかった。しかし、預けてからは何回も見

に行った。子離れしないといけないと思う。」

幼Fさん

アンケートへの回答は、預けたい

預けることにはためらいはない

アンケートとインタビュアーの回答一致・預けたい

「ちよつと離れることで親も、ほつとする時間ができて、リフレッシュできて、帰ってきたときに優しくなれる。」

幼Gさん

アンケートへの回答は預けたい

預けることにはためらいがある

アンケートとインタビュアーの回答不一致・預けたい／預けられなかった（泣いて）

「たまには預けてみることも冒険。でも、さみしい気持ちはある。下の子は本当に私しかだめな赤ちゃん時代があったので、ずっと預けられなかった。初めて預けた時、泣いて泣いて離れなかった子がきつと泣いてるって思ってきたら、全然泣いてなかったよって言われて、あ、そうって。泣くと思っていたのに、普通に遊んでいたっていうのを聞いて、母親の心配って何だっ

たのかなって。そこで、初めて気づいた。思い込みを捨てる。預けてもいいんだ。それまでは、絶対自分が見なくちゃ、この子は離れないからって思ってたのが、すごく何か気分が楽になった。そんなこともできたんだって思って。」

幼Hさん

アンケートへの回答は、預けたい

預けることにはためらいはない

アンケートとインタビュアーの回答一致・預けたい

「一日か一泊位なら、かえっていいのではないかと。でも、緊張が長く続くと可哀そう。預けることは母親のリフレッシュ、気分転換になる。子どもも一人で頑張る経験が出来るし。」

幼Iさん

アンケートへの回答は、預けたい

預けることにはためらいはない

アンケートとインタビュアーの回答不一致・預けたい／預けたくない

「一緒にいてあげたい。お迎えには必ず行けるようにとか。一緒にいるからって何かしてあげるわけでもないけど、やっぱり

いるのといないのでは違うのかなと思って。9つまでは親がいるよって話聞いて。家に帰って、ただいまって帰ってきたときに、やっぱり、家においてお帰りって言ってあげた方がいいのかななど思ってた。自分のためだけに預けるのは、自分の中ではあんまり。でも、他の人の考えを否定するのではない。」

2. 乳幼児期の子どもを預けることに対する母親の意識の形成に影響を及ぼす要因

インタビューで述べられている内容を分類すると以下のようになった。

① 母親自身の不安

保Aさん「預けたところのことや結構不安が多かった」

保Bさん「この子大丈夫かしらとか、保育所がどんな所か不安」

保Cさん「最初は保育所がどんなところなのか、子どもがどう感じるかが想像できないことが不安」

幼Bさん「ボンと預けるのって怖くてようしないかもしれない。万が一のことがあるかなとまで考えて」

② 子どもの状態・特性

保Aさん「びーびーびー泣いた。こんなに泣く泣く別れて仕事しないかんのかと」

保Bさん「はじめの一ヶ月は泣いて、こっちも涙が出て、

可哀そうに、あの子って」

幼Bさん「(子どもが)預けられないタイプなので」

幼Dさん「預けて迎えに行った時に泣いていたりする姿を見るとしばらくやめようと思う」

幼Gさん「私しか駄目な赤ちゃん時代があったので、ずっと預けられなかった」

③ 経済的な必然性

保Aさん「お金に余裕があれば、やめていたかもしれない。働かなければならないので、泣く泣く、夫を恨みながら働きに行っていた」

保Bさん「家計のために働いていたが、そうでなかったら、出来るだけ一緒にいたかもしれない。働かないとどうしようもないから入れるって感じ」

保Cさん「二人で働かないと、月々がちょっと苦しいかなあということで復帰した」

④ 子どもと一緒にいたい気持ち

保Aさん「子どもが成長するのを見ておきたかった」

保Bさん「家計のために働いていたが、そうでなかったら、出来るだけ一緒にいたかもしれない」

幼Aさん「何が起ころかわからない時期から任せるのは私自身がしたくなかった」

幼Cさん「私が第一発見者になりたい」

幼Dさん「やめれない仕事があるとかではないので、一緒にいる方がいいかなって思う」

幼Iさん「一緒にいてあげたい。いるといたくないでは違うかなって思ってる」

⑤ 周囲からの声

保Aさん「乳飲み子の時は一緒にいた方がいいというのがある。保育所の先生にエンジョイしているって言われても、朝は辛かった」

保Bさん「可哀そうになって言われる」「本に三歳までとか」

保Cさん「フルタイムで働かなくてもいいのに、子どもを朝から晩まで預けていることに罪悪感を感じることもあった。それに対して、保育所の先生が、子どもにとっては天国だから大丈夫ですって言ってもらって、ほっとしたことがあります」

保Dさん「親の意見は子どもが可哀そう。犠牲になっただけ」

幼Bさん「両親からものすごく反対された。三つまでは絶対に手元に置いて育てないとだめ。預けるなんてとんでもないときぎを刺された。両親から言われていなかったら、預けていたと思う」

幼Dさん「夫から、まだいいんじゃないって言われた」

幼Eさん「夫が絶対に三歳まではよそに預けるなって」

幼Iさん「9つまでは親がいるよって話聞いて」

⑥ 子どもと離れる体験

保Aさん「下の子の時は上を経験していたので、いつ行ってもこんなものと思った。兄弟で違う。最初の子の時はつらかった。下の子はそうでもなかった。」

保Bさん「二人目は泣いていたらかわいそうと思うけれど、ま、大丈夫って言う気持ちがある」「働かないとどうしようもないから入れるって感じ。でも、やってみたら、預けることはわるいことじゃないって思った」

幼Dさん「迎えに行った時、笑顔だとたまにはいいかと」

幼Gさん「初めて、預けた時泣いて泣いて離れなかった子がきつと泣いてるって思ったら、全嫉泣いていなかったよって言われて……すごく気が楽になった」

⑦ 母親自身のリフレッシュ体験

幼Bさん「一人目の時、見えないところに行ってくれたらっでもものすごく思った。自分もリラククスしてリセット出来て、子どもに接すると可愛い」

幼Fさん「ちよつと離れることで、親もほっとする時間が出来て、リフレッシュ出来て、帰って来た時に優しくなれる」

幼Hさん「リフレッシュになる。気分転換になる」

3. 語りのなかで揺れ動く気持ち

母親たちはインタビューにおいて、自分の経験を話しながら、気持ち様が揺れている様子が見られた。その揺れ動くプロセスが、語りの中に顕著に表れた三名の例を取り上げ、2.の①から⑦の母親の意識に影響を及ぼす要因に沿って整理してみる。

事例1 保Cさん

「子どもは機嫌よく行っているんですが、私としてはいいのかなって思うことと、フルタイムで仕事をしなくてもいいのに、子どもを朝から晩まで預けているので、一度それで、罪悪感を感じてしまったことはありません。また、投書があり、「自分の保育所では朝から晩まで、子どもたちが一杯です。社会的にもう少し、何らかの制度を取ってあげないと、狭い庭でこんだけの子どもがいつせいに入ることに社会的になにも思わないんでしょうか」って。それを読んだ時に「私が朝から晩まで預けていることが本当にいいのかって気持ちになった時にすごい罪悪感があったんですが、その時に保育所の先生が、気になさっているんじゃないですかみたいなことで声をかけてくださって、まあその時にちょっと泣いてしまったんですけども、保育所の先生が子どもとして、保育士に育てられることもいいと思うし、こ

ださったこともあって、それで、勤務形態を変えないでこれているんです。」

インタビュー全体から、保Cさんの気持ちの揺れをたどってみると、

① 母親自身の不安⇨最初は保育所がどんなところなのか、子どもがどう感じるかが想像できないことが不安だったけれど、

② 経済的な必然性⇨二人で働かないと、月々がちよつと苦しいかなあということとで復帰した。

⑤ 周囲からの声⇨フルタイムで働かなくてもいいのに、子どもを朝から晩まで預けていることに罪悪感を感じることもあった。でも、保育所の先生が、子どもにとつては天国だから大丈夫ですって言うてもらってほつとしたことがあります。

Cさんの場合は、預ける場所や子どもが預けても大丈夫なのだろうかと、不安を感じているが、経済的必然性から、預けている。しかし、朝から晩まで子どもを預けなければならぬわけではないのに、預けていることに罪悪感を感じている。しかし、その時に周りの人（保育所の先生）から声を掛けられ、自

分自身が支えられる経験をすることで、気持ち揺れながらも、自分の中の預けてもいいのかなという不安が、大丈夫という思いに変化している。

事例2 保Bさん

「保育所に行っているんですけど言ったら、可哀そうにねって。いや、可哀そうじゃないんだけどかって。まあ、泣いてたら、そう言われても仕方ないと思うけれど、ご機嫌に行っているのとか思うことありましたね。私の姉も、もちろん幼稚園に入れていられるけれど、自分が働くことには、子育てにすぐよくないことだと思っていて、議論しないようにしているんですが。そういう考えもわからないではないけれど、家計のためには仕方なく働いているのもあったし、そうじゃなかったら、出来るだけ一緒にいたかもしれないって……でも、やってみたら、預けることは悪い事じゃないなって思いました。」

〈仕事をするために預けるといふことに対しては？〉

「あたしが働かないと、どうしようもないから入れるって感じで」へ考える余地はない？」

「なしですね。やっぱりもう、最初の一カ月って泣きますから、もうこっちも涙が出て、かわいそうに、あの子っていう風に思っていました。幼稚園くらいがいいのかしらって思っていました。保育所がもう一つの家みたいになってしまってもね……、

お母さんがいいって言いますけれど、保育所にいる間は機嫌よくしているみたいだし、多少ちょっと無理はしても、最初は抵抗あったけれど、二人目を入れる時は思いませんでした。」

〈最初は抵抗があったというのは、可哀そうっていうのがご自分の中にあっただけ？〉

「よく、本なんかを読むと三歳まではお母さんと一緒にあがるじゃないですか。そういう可哀そうとかもあるし、この子大丈夫かしら、保育所がどんなところかも知らないし、不安、ま、初めての子だし、不安でしたな。」

〈お二人目の時は？〉

「泣いていたら可哀そうと思うんです。可哀そうと思うけれど、ま、大丈夫っていう気持ちがあるって感じ。どうなっちゃうんだらうっていう気持ちはなかったんで。」

保Bさんの気持ちの揺れをたどっていくと、

① 母親自身の不安 ② この子大丈夫かしら、保育所がどんなところかも知らないし、不安、ま、初めての子だし、不安でしたな。

⑤ 周囲からの声 ⑥ 保育所に行っているんです ⑦ って言うたら、『可哀そうにね』って。

私の姉ももちろん幼稚園に入れていられるけれど、自分が働くことには、子育てにすぐよくないことだと思っていて、

本なんかを読むと三歳まではお母さんと一緒とかあるじゃないですか。そういう可哀そうとかもあるし。いや、可哀そうじゃないんだけれどとかって。

② 子どもの状態・特性Ⅱやっぱりもう、最初の一カ月って泣きますから、もうこっちは涙が出て、可哀そうに、あの子っていう風に思っていました。

③ 経済的な必然性Ⅱ家計のために仕方なく働いているのもあったし、あたしが働かないと、どうしようもないから入れるって感じでそうでなかったら一緒にいたかもしれないって。

⑥ 子どもと離れる体験Ⅱでも、やってみたら、預けることは悪い事じゃないなあって思いました。保育所にいる間は機嫌よくしているみたいだし、最初は抵抗あったけれど、二人目を入れる時は思いませんでした。泣いていたら可哀そうと思うんです。可哀そうと思うけれど、ま、大丈夫っていう気持ちがあるって感じ。どうなっちゃうんだらうっていう気持ちはなかったんで。

Bさんの場合は、仕事をしたいから子どもを預けるのではなく、家計のために働くために預けており、母子のつながりの関

係の中に、自分ではどうすることも出来ない強い外的力が働いて、離れることを強いられており、そこには母子を必然的に切る作用が働いている。

また、子どもを預けることに対して、親や兄弟からの「預けることは可哀そうだ」といったことばや価値観に対して可哀そうなんじゃないんだけれどと否定的な思いを抱いているが、「最初の一カ月は子どもが泣いて、そして、自分も涙が出て、預けられる子どもをかわいそうと思った」と語っており、子どもの泣く様子を見て、母親自身も可哀そうにという思いになっている。しかし、預けてみたら、「機嫌良くしているみたいだし、子どもも平気みたい」と感じるようになり、実際に預ける経験を通して、二人目の時は泣いたら可哀そうだけれど大丈夫という思いに変化している。

V 考察

1. アンケートへの回答とインタビューでの語りの一致と不一致

アンケートの預けることに関する設問への回答を見ると、全体の七一%の母親が子どもを預けたいと思っている。また、預けることにためらいを感じているのは二九%であり、ためらいがないと回答している母親が七一%いることから、母親は子ど

もを預けたい思いを持っており、預けることにためらいはあまり持っていないことがわかった。

次に、預ける、預けないに関してのアンケートへの回答とインタビューで語られることが一致していたのは五七％であった。

その中で、保育所の母親は五人中五人が一致しており、インタビュアーの中で気持ちが変化することはないようだった。しかし、幼稚園の母親の場合、九人中三人だけが一致しており、六人は一致していない。不一致の内容は、幼B・D・Gさんは「預けたい気持ちがあるけれど、子どもが預けられないタイプなので預けない」、幼C・Iさんは「建前としては預けることはいいことだと思うが、自分は子どもを預けたくない」、幼Eさんは「預けたいけれど、周囲の人たちから言われることで預けない」、といったように、いくつかのパターンが見られた。

インタビューの中で、母親たちは聞き手に向かって語ることを通して、自分の思いが湧き出てきたり、気持ちが揺れ動いている。アンケートへの回答とインタビューで語られる内容が一致しない理由としては、一つには2つの調査の間に時間的な間隔があいていることが可能性として考えられる。もう一つ考えられるのは、語っているうちに気持ちが揺れ動くためではないかということである。他の人がどのように聴いていくのか、かわっていくのかによっても、母親が意識し、表現する気持ちは変化するということに注意を払う必要があるだろう。

2. 乳幼児期の子どもを預けることに対する母親の意識の形成

に影響を及ぼす要因

(1) 子育ての今ここの個々の具体的場面とともに想起される母親自身の思い

① 母親自身の不安

母親自身が子どもを預ける時に、子どもが不安に感じるのはないか、子どもは預けても大丈夫なのだろうかと不安になっている。また、預ける先の保育所がどのようなところなのかわからないことを不安に思う気持ちがある。

② 子どもの状態・特性

子どもが泣くことは、子どもを自分が泣かせてしまうという思いにつながるのか、可哀そうなことをしているといた思いを感じ、母親自身、子どもと引き裂かれる思いを抱いている。そこには子どもと自分との一体感があるのである。

③ 経済的な必然性

経済的な必然性がなければ、預けなくてもいいのにと思ったり、預けたくないと思っており、外的な力で引き裂かれる思いを抱いている。

④ 子どもと一緒にいたい気持ち

子どもにとって、母親と一緒にいるのと、いないのでは違うのではないかと思っていたり、他の人に自分の子ども

を任せることはしたくないと思っている。そのような母親は子どものそばにいたことが子どもにとってよいことであると信じているからであろう。

また、今回インタビューした幼Aさんは「絶対的信頼関係が欲しかったから。それだけ（預けること）はしたくなかったと言い、幼Cさんは「わたしが第一の発見者になりたい。なんでも。預けるなんて」と語っている。また、幼Gさんは「下の子は本当に私しか駄目な赤ちゃん時代があったので、ずっと預けられなかった」と言っているが、自分でなければ駄目なのだという思いや、自分が子どもにとって絶対的存在であると信じている思いがあるようだ。

これらの母親が子どもを預けることを考える時、子どもは母親が育てることが自分にとって安心できることであり、子どもにとっても一番いいことであると感じているようだ。そのことは、自分自身の存在が子どもにとって、欠くことが出来ない絶対的な存在であると思うことにつながっている。母親自身が自分の存在を意味のあるものと信じ、万能感を感じることに通じているのかもしれない。しかし、そう感じることは、同時に母親が子どもにとって一番の存在であるというプレッシャーから母親自身が逃れることが出来ないことと同じ意味をも、持つことになろう。

(2) 他者の価値観に影響され生じる感情

⑤ 周囲からの声

「子どもは母親が育てるのが一番いい」

「子育ては母親の仕事」

「三歳までは子どもは親のそばで育てられることが必要」
 「小さな子どもを保育所などに預けることは可哀そう」

このような様々な声が母親に向けられることも多くあり、周りからの言葉に悩まされることも多いようだ。

「母親なのだから、一日二四時間、週休ゼロ日、それも無給で子の面倒を見るのは当然という価値観」「せめて子どもが三歳くらいになるまでは、母親がいつも一緒にいてあげるべきといういわゆる三歳児神話」「もし母親と一緒にいなければ、その後の心理的発達に悪い影響が出てくるとも言われ、ワーキングマザーばかりではなく、専業主婦にとっても大きなプレッシャーとなっている」といったことも言われている。それに対して、母親は、そんなことを言わないでほしいと思いつつも、泣いている子どもを預ける自分は悪い母親なのだろうかと思ったり、育児休暇を終えて、仕事に復帰する母親の心の中には、様々な事情から子どもを預けないといけないが、本当は子どものそばにいてやらないといけないのについてやれない自分を責める気持ちがあるのではないだろうか。

しかし、このような働く母親だけではなく、専業主婦である母親をも縛る三歳児神話のような価値観は絶対的なものであると言えるのであろうか。

根ヶ山は「従来から、育児において、母子が時間的、空間的に常に『ともにいる』ことの重要性があまりにも強調されすぎてきた感があるが……母子が『離れる』ことも、母子どちらの発達にとっても極めて重要な意味を持っていることを我々に教えてくれる」⁽³⁾と述べている。母と子はいつまでもいつまでも一緒に生きていくのではない。子育ての大きな目標の一つとして、子どもをひとりの人間として自立させていくことがある。

そのためには、子どもの成長とともに離れていくことに大きな意味があると言えるだろう。このように、子育ては母親がするものという一方の考え方だけではなく、母子が「離れること」も子育てにおいて、重要なことだという考え方を持つことも大切なことであろう。

- (3) 時間的経過とともに想起される感情（振り返った時、経験後の意識）

⑥ 子どもと離れる体験

体験することを通して驚いたり、喜んだり、感激したり、安心している。

幼Gさんが次のように言っている。

「泣くと思っていたのに、普通に遊んでいたって言うのを聞いて、母親の心配ってなんだったのかなって。そこで初めて気付いた。思いこみを捨てる。預けてもいいんだ。絶対に自分が見なくちゃ、この子は離れないからって思っていたのが、すごく、何か気が楽になった」

子どもは自分がいなくてだめなんだという思いこみを自分が勝手にしていたことに気づき、預けてもいいのだと思うようになり、自分を縛っていたことから解放されるような思いを感じているようだ。

また、保Bさんは「泣いていたら可哀そうと思うんです。可哀そうと思うけれど、ま、大丈夫っていう気持ちがあるって感じ。どうなっちゃうんだろうっていう気持ちはなかったんで」と言っており、泣かれることで可哀そうと思ったり、どうなるんだろうといった不安を抱いていたが、経験したことや時間的な経過を経て、大丈夫という思いを獲得できるようになっている。

3. 母親の気持ちの揺れ

今回のインタビューに参加した母親はアンケート調査における質問項目「子どもを預けることにためらいはありますか」に対して、一四人中一〇人は「ためらいはない」と答えているが、

インタビュアーで語られた母親の気持ちは、預けることに対して「ためらいがある、ない」といったように一面的に割り切れるものではなかった。語りの中からは「ためらいはない」と言いつつも、母親は子どもと離れる時、子どもが泣くことで、可哀そうだと感じたり、周囲からの様々な価値観を感じ、自責の念を抱き、子どもを預けることは本当にいいのだろうかと迷い、揺れ動いている母親の姿が浮かび上がってきた。

しかし、一人目と二人目では対応の変化がみられる。経済な必然性の中で、別れる瞬間には痛みや辛さを感じているが、実際に預ける経験を通して、子どもは、母親から離れても大丈夫な存在であること、また、子どもと離れることで、自分自身が一歩と出来ることや、そんな時間を持つことで、より子どもに優しく接することが出来ることに気づくようになっていく。経験することが、ある種の安心感やイメージを母親の中に芽生えさせたと言えるだろう。

子どもを預けることを通して、泣くことを含めた預けるといふことは、親子の存在を脅かすものではなく、大丈夫という漠然とした安心感とつながっていくのであろう。この子どもと離れても大丈夫という気持ちを母親が獲得出来るのが母親と子どもにとって大切なことであろう。

VI おわりに

母親たちは子育てをする中で、つらい、可哀そうだと感じる気持ちや迷いや様々な思いを抱いているようであり、預けることをどのように思うかという質問は、母親に様々な思いを掻き立てる質問であったようだ。

母親の語りから抽出した子どもと離れる時に抱く気持ちは「預けたい」「預けたくない」と言ったような一面的なものではなく、様々な思いや価値観に揺れ動いていることがわかった。

高石⁽⁴⁾はこの様相を「多相的」という言葉で表している。それは、子育てをしている今ここでの個々の具体的場面において経験される感情(強い怒り、イライラ、拒否感、驚き、喜び、感激)と、時間的展望「過去と未来」を持つ中で経験される感情(楽しい、生きがい、育てることで自分も成長できたと思う)との複合的な構造を持ち、一面を提示されともう一面も意識に立ちあがってくるような性質をもつものであると述べている。母親自身は自分の思いが多相的であることに気づいていないことも多いのではないだろうか。母親の意識の多相性を知り、一般的、固定的な価値観から自由な聴き手がいれば、母親は、多種多様な価値観にとらわれることなく、様々な今ここでの思いを語ったり、多相的に子どもと離れることを考えることが可

能になるであろう。それは、目の前のことに振り回されてしまっている母親の気持ちや、こうでなければならぬという考えや、自分を縛っているものから母親を解放することにつながり、子育てへの肯定的な意味づけをもたらすと云えるのではないだろうか。

註

- (1) 斎藤環「若者」を育てることの困難 高石恭子編『育てることの困難』人文書院、二〇〇七年、一四五頁。
- (2) 香山リカ『母親はなぜ生きづらいか』講談社新書、二〇一〇年、一〇四頁。
- (3) 根ヶ山光一『子別れの心理学』福村出版、一九九五年、一七五―一七六頁。
- (4) 高石恭子、穂苅千恵、甲斐暁子「母親の子育ての意識の構造——幼稚園児を持つ母親インタビューの質的分析を通して——」日本心理臨床学会第二七回大会学会発表論文集、二〇〇八年、二〇九頁。

(かい あきこ)／臨床心理学